

バレーボールにおけるサーブの種類と分類について

(I) 文献にみる実状

宮 田 和 信

On the Types and the Classification of Services in Volleyball

(1) Reference to services of volleyball in literature on volleyball

Kazunobu MIYATA

Received April 20, 1977.

I 序

II サーブの分類とその特質

III サーブの名称とその吟味

IV ま と め

I 序

バレーボール競技におけるサーブ^{註1)}は、試合開始のためにボールを相手コートにただ入れればよいと考えられていた初期の技法から、次第にその性格が変わってきた。特に6人制バレーボールが採用されるに至ってからはサーブのトライアルも1本になり、「安全・確実」のサーブから「確実・攻撃」のサーブが追求されるようになった。そのためにサーブの研究が進み、次々と新しいサーブの技法が開拓されている。しかしサーブ技法の名称や種類あるいはその分類については系統的なものはなく、各人各様の判断によってなされているのが現状である。

バレーボールの指導に当って、とくに学校体育としてのバレーボールの学習の場において、サーブの指導を取り上げるときに、いろんなサーブ技法の名称を統一するとともに、明確な根拠に基づいた種類や系統的な分類が確立されることによって、よりよい指導の効果を望むことができる筈である。そこで筆者は、サーブの種類の取り上げ方や系統的な分類のしかたについて検討しようと企画し、その第一群としてバレーボール関係の著書や学習参考書（以下参考文献と呼ぶ）をもとにして、実状を浮きぼりにしようとした。

今回調査の対象にした参考文献は末尾にかかげた34冊^{1)~34)}であるが、これらの参考文献でみ

る限り、サーブの取り上げ方や分類のしかた、また、サーブの球質を決める要因等、ほとんどすべてに関して各著者による各様の解釈がなされているのが特徴である。同一著者による異なった見解もめずらしいことではない。従って、これらの参考文献からサーブの種類や分類について一般的な定説を引き出すことはきわめて困難なように思われた。そこで次のように問題点をしばって考察を進めてみたい。

- 1) 各著者のサーブの取り上げ方が、どの程度系統的であるか。また、種類の取り上げ方や分類のしかたが何を根拠になされているか。
- 2) 各サーブについて「打法」と「球質」はどのように扱われているか。また、各サーブ間の関連をどのように扱っているか。

Ⅱ サーブの分類とその特質

各著者のサーブの取り上げ方が系統的であるか否かについては、著書にあらわれた分類への意欲からうかがうことができる。著者によっては具体的で、かつ意図的に行なわれているが、無雑作にサーブの種類を羅列したにすぎないと思われるものも少なくない。そこで、この点について次の3つの評価基準を設定し、各文献を分類した。

- A：明確な意図のもとに、種類を取り上げ分類しているもの。例えば「種類と分類」のような見出しになっていたり、「…次のように分類できる」のように明示してあるもの。
- B：明確な意図のもとに、種類を挙げ分類しているとは思われないが、順序づけをして挙げてあもの。例えば「種類と分類」のような明示はないが、類型化して纏めてあるもの。
- C：上記A、Bのどちらにも相当しないもの。

なお、サーブの種類之列記に関しては「打法」の面から導かれたものか「球質」の面から導かれたものか、それとも「打法と球質」の両面から導かれたものであるかについても著者の間に差異がみられる。以上の観点から参考文献を評価すると第1表ようになる。

サーブの種類を取り上げ方や分類のしかたが、意図的に明示された形で行なわれている評価基準Aの文献は13冊（38％）にすぎない。また、一応分類された形式をとって纏められた評価基準Bの文献は多い（44％）が、分類への意欲をうかがうことはできない。

種類を取り上げ方や分類の根拠については、打法や球質という単純な2つの要素で分けたのであるが、打法や球質は各著者に共通して統一されたものではない。打法についてはボールをヒットする際の腕の振り方やコートに対する身体の向き、または助走するか否かというような観点到立ったものであったり、また球質についてはボールの回転のしかたや、打たれたボールの軌跡という面からアプローチされたものであったりする。さらに、例えば前田の文献²⁾にみられるように、結果からみて分類の根拠は球質からと思われても、説明文ではその球質に関する打法についても触れてあるのが普通である。前田の文献^{1) 2) 12) 21)}は球質の面から分類を試みようとする傾向がうかがわれる。

第1表からみると、打法から取り上げているもの、あるいは打法によって取り上げ、然るのちに球質との関連をみようとしているものが大半である。打法と球質を併行して取り上げているものや、球質のみから取り上げているものも少なくない。

松平²⁰⁾による「バレーボール戦術集」の中では、まず球質を挙げ、然るのちに打法との繋がり

第1表 参考文献の評価基準とサーブの種類や分類の取り上げ方の根拠

参考文献番号	評価基準	根拠 取り上げ方の 種類や分類の	参考文献番号	評価基準	根拠 取り上げ方の 種類や分類の	参考文献番号	評価基準	根拠 取り上げ方の 種類や分類の	参考文献番号	評価基準	根拠 取り上げ方の 種類や分類の
1	C	打法, 球質	10	B	球質	19	C	打法	28	B	打法→球質
2	B	球質	11	B	打法	20	A	球質→打法	29	A	打法, 球質
3	C	打法	12	C	球質	21	C	球質	30	A	打法, 球質
4	A	打法	13	B	球質	22	A	打法, 球質	31	A	打法
5	C	打法, 球質	14	B	打法→球質	23	A	打法	32	A	打法, 球質
6	B	打法→球質	15	A	打法→球質	24	A	打法→球質	33	B	打法
7	B	打法→球質	16	B	打法→球質	25	B	打法	34	B	打法
8	A	打法, 球質	17	A	打法, 球質	26	A	打法→球質			
9	B	打法, 球質	18	B	打法→球質	27	B	打法→球質			

(註) 「打法, 球質」は打法と球質が混在しているもの、あるいは打法と球質を分けているもの。「打法→球質」はまず打法によって大別し、さらに球質について細分類したもの。

りをみている。このような試みは独特のもので、しかもフローター・サーブを球質としてとらえ、このための打法としてオーバーハンド打法とテニス式打法に分けている。

サーブ(競技規則³⁵⁾³⁶⁾における定義づけの上での名称は「サービス」とは、「後衛右の競技者が、手あるいは腕でボールをネットを越えて相手方コート内へ打ち込むプレー…」(6人制—52年版)であり、また「順番に当たった競技者が手あるいは腕でボールを物体または他の競技者およびネットに接触しないでネットを越えて相手方コート内に打ち込むプレー…」(9人制—52年版)である。すなわち、サーバーがバックラインの後方から打ち込んだボールを相手チームの1人がレシーブする直前までの一連の総体を意味するものである。この過程には、サーバーがどちらを向いて立つか、ボールをいかなる手の使い方によって打ち出したか、打ち出されたボールはどのような軌跡を描いて相手コートへ飛んだか等のさまざまな要素が含まれている。とすれば、広義における打法のみ、あるいは球質のみから種類が論じられるほど単純なものではないことが明らかである。

このような観点から、筆者はサーブの分類は打法と球質との組合せによって行なうことが望ましいと考える。参考文献の中では20冊²⁾が両者の組合せによる分類をしているようである。この20冊がどれくらいの信頼すべき分類を行なっているかの検討は次節に譲るとして、今ここでサーブの種類と分類について明らかな意図をもち、しかも具体的にとりくんでいると思われるものとしては、T. Hoch (福岡・守谷沢)⁴⁾、山本⁸⁾、豊田 (博)¹⁵⁾²⁴⁾、郷守と朽堀²²⁾、島津²⁶⁾、朽堀²⁹⁾、郷守³⁰⁾等が挙げられるであろう。とくに山本、郷守、朽堀たちの関与する文献は分類への意欲をうかがうことができる。

Ⅲ サーブの名称とその吟味

参考文献38冊^{1)~38)}の中にみられるサーブを抽出し、文献にあらわれた頻数によって多いものをAにランクづけし、そうでないものをBにランクづけして第2表に示した。今ここではAにランクづけされ、また一般的にもよく用いられてきたと思われるサーブを中心に取り上げて論じてみたい。

第2表 参考文献にあらわれたサーブの名称

A	オーバーハンド・サーブ（上手サーブ）、アンダーハンド・サーブ（下手サーブ）、第1サーブ（ファースト・サーブ）、第2サーブ（セカンド・サーブ）、ドライブ・サーブ、スライド・サーブ、フローター・サーブ、安全サーブ、変化球サーブ、逆回転（式）サーブ、ランニング・サーブ
B	オーバーヘッド・サーブ（サービス・バランスェー、上方打サーブ、フック・サーブ、ウィンドミル・サーブ）、アンダーアーム・サーブ（下方打サーブ）、横なぐりサーブ、サイド・サーブ、サイド・アンダーハンド・サーブ、ストレート・サーブ、豪球サーブ、テニス式サーブ（スパイク式サーブ）、スタンディング・サーブ、ステップ・サーブ、カッティング・サーブ（ひょろひょろサーブ、チェンジアップ・サーブ、スクリュエ・サーブ、スライダー・サーブ、木の葉落し）、打ち揚げ式サーブ（花火式サーブ、チェコ式サーブ、天井サーブ）

1. オーバーハンド・サーブについて

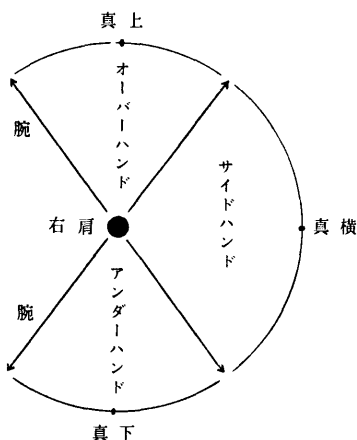
コートに対して横向きに立ち、右利きの者なら左手でボールをトスアップして、右手を体側から頭上にスウィングすることによって前方に打ち出すサーブで、ボールの主なる球質はドライブ性のものである—これが9人制の隆盛時から最近まで続いたオーバーハンド・サーブに対する一般的な解釈であった。9人制の華やかだった我が国で第1サーブとして最も多く使用された打法であったので、オーバーハンド・サーブといえは、これを指すものと思われてきたのも当然であろう。前田²⁾はこのような打法を「オーソドックスなフォーム」とであると説明している。笠井と小鹿野⁵⁾は、「オーバーハンド・サーブ（またはファースト・サーブ）」と説明し、豊田(直)⁶⁾も第1サーブの中に先ずオーバーハンド・サーブを挙げ、さらにオーバーハンド・サーブの中にドライブ・サーブを第1に挙げているのはその表われとみられ、さらに1977年に出版された文研出版編著³³⁾にみられるように、現在でもなおかつ「上手サーブ（第1サーブ）」と説明しているのも、オーバーハンド・サーブと第1サーブ、さらにドライブ・サーブの三者の深い繋がりを示すものと解釈できよう。しかし、この「オーソドックスなフォーム」から打たれるサーブの球質はドライブ性のものだけではない。前田¹⁾が論じているようにオーバーハンド・サーブの中には、スライド性のサーブや変化球もあることが以前から注目され、「伸びるサーブになる時がある」ことや「ひょろひょろサーブ」というレシーブしがたいサーブがあることが知られていた。一方、前田は同著¹⁾においては伸びるサーブやひょろひょろサーブに関してのボールの回転については全く触れていない。また、スライド性のサーブについて「ドライブ・サーブに比較するとやや確率にとぼしい」と説明しているが、現在のサーブの効果についての評価とはマッチしない面であろう。

オーバーハンド・サーブの打法については、冒頭に記したような定説が現存している反面に、山本⁸⁾は1965年にフローター・サーブをオーバーハンド・サーブの中に位置づけている。当時、山本はオーバーハンド打法を「上手から打つ打法」と解釈したものと思われる。すなわちオーバーハンド・サーブを2つに分け、1つを「フローター・サーブ」、他を「(普通の)上手サーブ」としているが、「(普通の)上手サーブ」としたあたり、苦心のあとがうかがえる。

「オーバーハンド打法による変化球サーブ」といったのは松平¹⁰⁾(1967年刊)である。変化球サーブについては、これより以前にも前田の著書²⁾の中に出ているが、サーブの種類の一名称として分類づけられてはいなかったようである。前田による説明文を手がかりとしての推察であるが、単なる「変化する球」ぐらいの意味だったと思われる。まだ一般的な名称を持たない変化球サーブは、1960年の世界選手権大会(ブラジル)において、日本の女子チームが披露したのが始まりといわれている。当時、この「変化する球」は「木の葉落し」の愛称で呼ばれ、大会後急速に広がり、1964年の東京オリンピックで「変化球サーブ」の名称が定着し、各国が競って実戦に用いたといわれている¹⁰⁾。

山本がフローター・サーブをオーバーハンド・サーブの中に位置づけて分類したのは1965年であるが、それ以後に出版された豊田(直)⁹⁾²⁷⁾、金子¹¹⁾、松平他¹³⁾、豊田(博)他¹⁴⁾、豊田(博)¹⁵⁾²⁴⁾、今野他²³⁾、西郷³¹⁾らの著書においても、両者は同じ次元に置かれたままになっている。両サーブが同じ次元に並べてあることは互いに独立しているものと解釈でき、オーバーハンド打法が前田²⁾のいう「オーソドックスなフォーム」あるいは山本⁸⁾のいう「(普通の)上手サーブ」として扱われているようである。また、フローター・サーブをオーバーハンド・サーブの中に含めて考える場合は、オーバーハンド・サーブを上手からスウィングするサーブというような扱え方をしているものと思われる。郷守³⁰⁾はフローター・サーブをオーバーハンド・サーブの中に位置づけている。ジェレズニャク²⁸⁾も同じ見解に立ち、オーバーハンド・サーブの中にドライブ・サーブとフローター・サーブを含めている。

さて、フローター・サーブをオーバーハンド・サーブの一つとみた場合、従来からの「オー



第1図 腕の振り方によるサーブの分類(郷守、朽堀による)

ソドックスなオーバーハンド・サーブ」との区別をどうするか? 郷守³⁰⁾も山本⁸⁾と同じく「ふつうのオーバーハンド・サーブ」(傍点筆者)とし、オーバーハンド(=上手)なるフローター・サーブと区別しようとした。これは苦肉の策である。生沼³²⁾は、これまで打法と球質が混在していたフローター・サーブについて、その打法を「テニス式サーブ」とし、その球質をボールの回転の面から捉え「フローター・サーブ」として分けて考えている。Diagram Group 編集による「RULES OF THE GAME」の中では、打つ時のフォームによって分類し、郷守や山本が苦心した「ふつうのオーバーハンド・サーブ」を「Hook serve」、フローター・サーブを「Tennis serve」としている。生沼や Diagram Group の分類は、両者とも解釈の上

での混乱がなく明晰である。

サーブの分類に意欲的に取り組んだと思われる郷守と朽堀²²⁾は、サーブを打つ腕の使い方の違いから第1図のように分類し、フローター・サーブをオーバーハンド・サーブの中に位置づけている。フローター・サーブについては腕のスウィングが上手か、下手かの観点に立てば上手打法であり、打つ時の身体の向き、姿勢等からみれば「ふつうのオーバーハンド・サーブ」とは全く異なるものである。現在においても、なおオーバーハンド・サーブとフローター・サーブの関係や分類上の位置づけが不明確である原因は、フローター・サーブの中に存在する打法と球質との間の比重関係が、著者によって異なるからである。しかし、前田¹²⁾によると「もともとはボールの下部をたたいて回転を加えるとボールが浮くように伸びてゆくサーブ…」がフローター・サーブであることから、フローター・サーブは球質の観点に立ったサーブであることを意味している。

2. アンダーハンド・サーブについて

アンダーハンド・サーブについて松田監修の「中学ばらシリーズ中学保健体育1～3年」から説明を引用すれば、「ネットに対して正対し、両足は前後に開いてかまえる。軽くトスし、下からすくい上げるように打つ。体重は後ろ足から前足へ」ということになる。かつて「安全・確実」を目標とした9人制バレーボールで、第2サーブとしてよく用いられていたサーブであったために「安全サーブ、第2サーブ」とも呼ばれていた。しかし、「現在では2本ともこの打ち方〔オーバーハンド・サーブ〕でサーブをするのがほとんどである」と郷守³⁰⁾が指摘しているように、現今の9人制の大会で、第2サーブにアンダーハンド・サーブをする人はほとんど見られなくなった。そのために「アンダーハンド・サーブ即安全サーブ」の考え方は残るとしても、「アンダーハンド・サーブ即第2サーブ」の考え方はなくなるであろう。このような観点に立つと、同じく郷守³⁰⁾の「アンダーハンド・サーブあるいはセカンド・サーブ」や文研出版編³³⁾にみられる「下手サーブ（第2サーブ）」というような説明は不合理である。

アンダーハンド・サーブは、相手コートに入れるためには最も安全かつ確実な技法であり、多くの場合球質として特徴ある変化が伴わないために、サーブの分類の位置づけ等に関して諸説が存在しないのであろう。しかし、豊田(直)⁶⁾が触れているように「ボールに前回の回転やこれと逆の回転をかけ、受け難くすることが可能である」ことも確かであるが、球威が他のサーブに劣るために、多く説明がされなかったものと思われる。

ジェレズニャクラ²⁸⁾はこのサーブを「ストレート・サーブ」と「サイド・サーブ」の2つに分けて考えている。アンダーハンド・サーブの技法や球質についてはあまり検討を加えなかった我が国の実状からすれば、ジェレズニャクラの考え方は特徴あるものとみることができよう。

3. フローター・サーブについて

フローター・サーブの分類上の位置づけについては(i)オーバーハンド・サーブとの関係、ならびに(ii)球質をどのように把えるか、の2点から考えなければならない。前者については、フローター・サーブが打法の面から論じられているか、あるいは球質の面から論じられているかにも関連があるが、このことに関しては前節で一応の検討を加えたので、ここでは後者を中心

第3表 フローター・サーブを取り上げている文献の分析

参考文献番号	分類上の根拠	ボールの回転について	球質	備考	参考文献番号	分類上の根拠	ボールの回転について	球質	備考
1	球質				18	打法	○	ドライブ 変化球	フローター・サーブ (テニス式サーブ)
2	球質	◎	上下しながらおちる		20	球質	◎	変化球	フローター・サーブ (=変化球)
4	打法				21	球質		アップ性のボール, 沈むボール	
6	打法			第1サーブの中に 位置づけ	22	打法 球質		無回転, ドライブ, ホップ, スクリュー	
7	打法		スライド・サーブ と別のもの		23	打法			
8	打法				24	打法	○	前回り→ドライブ 無回転→変化球	
9	打法		スライド・サーブ と同じ		25	打法			
10	球質	○	回転→スライド 無回転→変化球	スライド・サーブ はフローター・サーブ の中のひとつ	26	打法		ドライブ, 変化球 に近いサーブ	フローター・サーブ (テニス式サーブ)
11	打法	◎	カーブしたりアップ したり		27	打法		スライド・サーブ と別のもの	フローター・サーブ (スパイク式サーブ)
12	球質	○	回転→スライド 無回転→変化球	スライド・サーブ はフローター・サーブ の中のひとつ	28	球質			オーバーハンド・ サーブの中に位置 づけ
13	球質	◎	回転なし。あまり 回転なし 不自然な変化		29	球質	○	無回転, 逆回転。 スライド・サーブ と別のもの	
14	打法	○	ドライブ 変化球	フローター・サーブ (テニス式サーブ)	30	打法		ドライブ, スライド。 スライド・サーブと 別のもの	オーバーハンド・ サーブの中のひとつ
15	打法	○	回転→ドライブ 無回転→変化球		31	打法			
16	打法				32	球質			テニス式サーブと フローター・サーブ の区別
17	打法								

(注) ◎印は、ボールの回転を無回転とするもの

に論を進めたい。

日本選手がフローター・サーブに初めて接したのは、1953年に早稲田大学のバレーボールチームが渡米した時だといわれている¹⁰⁾。前田は1961年刊の著書²⁾でフローター・サーブについて

で論じ、「ノー・スピンとかいって、回転しないことが特徴でボールが上下しながらおちる」とボールの無回転を肯定しているものの、1969年刊の著書¹²⁾では「もともとはボールの下部をたたいて回転を加えるとボールが浮くように伸びていくサーブである」と解説している。前田の両説の間には矛盾があるが、フローター・サーブの名称の起りからみると後者の説明が当を得ているであろう。つまり当初のフローター・サーブはボールを回転させて浮かせるのが目的であったと思われ、一番オーソドックスな打ち方としては「サーブを打とうとする方向にボールを持って構える。軽くトスを右肩やや前方に上げ、利き腕を振り上げ、肘をスパイクと同様耳の横に引く。肘を前に振り出しつつ、肘を伸ばし、できるだけ高い位置でボールの真横を手首の固い部分で前方に押し出すように打つ²⁴⁾」のが一般的であろう。球質の面から起ったと思われるこのサーブは、打法に特色があることから、打法が球質と同程度に、あるいはそれ以上に注目されるサーブになったのではないかと推察される。

フローター・サーブを取り上げている29冊の文献について分析したのが第3表である。このうち分類上におけるサーブの扱え方の根拠（基準）として打法においたのが18冊であり、球質に基づくのは10冊、打法と球質の両面を考えようとしたのが1冊であった。また、ボールの回転（無回転を含む）について触れている文献は11冊であった。フローター・サーブを位置づける場合に、ボールの回転の有無が球質を決めることから、筆者は、ボールの回転について吟味することが重要な要素と考えている。11冊の文献の中でフローター・サーブは無回転と明示してあるのが4冊（第3表の◎印）で、残り7冊（○印）は回転することや回転させることがあることを明らかにしている。また、ボールの回転について触れている11冊の文献では、無回転の場合は変化球になり、回転させるとドライブ球やスライド球になることを説明している。ボールの回転についての吟味は別として、球質について具体的に論じたものが18冊²⁵⁾である。質球は上記の変化球とドライブ球、それにスライド球が主なものとなっている。

フローター・サーブのボールの回転や球質を文献によって規定することは困難であろうが、以上の検討からフローター・サーブを一般的に考えられているように即「無回転→変化球」に結びつけることもまた危険を伴う恐れがある。第4表は、新興出版社編著³⁷⁾（1977年度版）に出ている問題である。（ ）の中に入れることばは(1)オーバー、(2)回転、より以外にないと思いつつも、文章全体には矛盾がある。では、第5表の文章は正解か？不正解か？同じ問題集の

第4表 新興出版社のテスト問題の例①

次の文中（ ）に適当なことばを書き入れなさい。

- (1) ドライブするサーブは、（ ）ハンドで打つ。
- (2) フローターサーブでは、ボールに（ ）を与えず、そのために変化するサーブである。

ひとコマで適当と思ったら○印を、不適当と思ったら×印をつける問題である。同著巻末に掲げられた「正解」は「×」となっている。クラブ活動等で技法に磨きをかけた者や、あるいは幾冊かの参考書を比較検討した者ほど、問題の不合理性について理解するであろう。この答は「○」の時もありうるからである。

松平²⁰⁾はフローター・サーブが球質（＝変化球）を意味するものに解釈し、この球質のため

第5表 新興出版社のテスト問題の例②

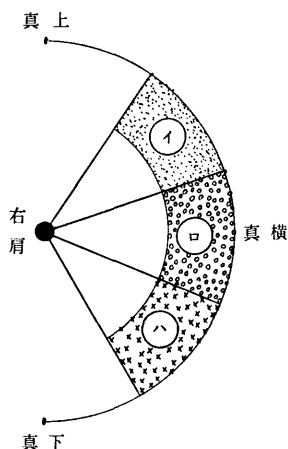
- | |
|--|
| (1) |
| (2) フローターサーブというのは、ボールに回転を与えて、ドライブさせようとするサーブのことである。 |
| (3) |

の打法にオーバーハンド打法とテニス式打法があるとしている。すなわち「オーバーハンド打法によるフローター・サーブ」がありうることになる。他の文献がほとんど「テニス式打法によるフローター・サーブ」の域を出ていないことを考えれば、松平のこのような考え方は独特なものであり、その後同じような考え方に立ったものとして、生沼³²⁾が挙げられる。フローター・サーブが球質を意味し、テニス式サーブが打法を意味するとすれば、今までの分類上の混乱はなくなるであろう。

フローター・サーブとスライド・サーブの関係を、豊田(直)⁹⁾は「同じ球質」であることを図示しているが、同氏と山本との共著⁷⁾では「異なる球質」として図示している。豊田(直)²⁷⁾、朽堀²⁹⁾、郷守³⁰⁾らは具体的な根拠(相違点)は明らかにしていないが、フローター・サーブはスライド・サーブとは異なるものとして分類している。前田¹⁾²⁾¹²⁾²¹⁾は球質によってサーブを取り上げているのが特徴であるが、スライド・サーブをフローター・サーブの中のひとつとして位置づけ¹²⁾、また同氏と同じ見解に立つものに松平¹⁰⁾があげられる。

4. サイドハンド・サーブについて

サイドハンド・サーブに関しての問題点の1つは、オーバーハンド・サーブあるいはアンダーハンド・サーブとの関係、すなわち両サーブから独立したものであるか否かの解明が上げられる。第2には打点についてである。以上の問題点を整理して纏めてみたのが第6表である。



第2図 サイドハンド・サーブの打点(ゾーン)

文献10冊がサイドハンド・サーブを取り上げている。このうち6冊はオーバーハンド・サーブやアンダーハンド・サーブからは独立したものとして扱われているが、オーバーハンド・サーブの変形とされたり²²⁾、アンダーハンド・サーブの中で説明されたり²⁸⁾することもある。郷守³⁰⁾は「サイドハンド・サーブは、オーバーハンド・サーブの腕のスイングが水平に近くなったものと考えてよいし、逆にアンダーハンド・サーブのスイングを次々に高くしていけば、サイドハンド、オーバーハンドと移行しうるものである」と説明し、サイドハンド・サーブの位置づけに苦慮している様子がうかがえる。

打点に関しては第2図のように3つのゾーンが考えられ、そのゾーンの違によって名称を区別しようとする傾向もみられる。豊田(直)⁶⁾、山本⁸⁾、今野と安西²³⁾らは打点④で

第6表 サイドハンド・サーブの分析

参考文献番号	分析内容	オーバーハンド、アンダーハンドとの関係				打点	備考
		独立	中ドオーに・サーバ位置づけのン	中ドアンに・ン位置づけのン	その他		
1		○				不明	横なぐり。オーバーハンド・サーブより確実性にとばしい
6		○				④	サイドハンド・サーブ→第1サーブ サイド・アンダーハンド・サーブ→第2サーブ
8			○			④	
11		○				⑥	
22			○			④～⑥	左右のボールの変化がつけやすい →実践的
23		○				④	女性に適した打ち方
28				○		⑥	サイド・サーブ
29		○				不明	ノー・スピン
30					○	—	
31		○				⑥	逆回転サーブ。打点④によるものはスリークォーター・サーブ

(註) 打点については第2図に基づくものである。

行なわれるものをサイドハンド・サーブと解釈しているが、西郷³¹⁾はこの打点におけるサーブを「スリークォーター・サーブ」と呼んでいる。西郷や金子¹¹⁾は⑥で行なうものをサイドハンド・サーブとしている。

豊田(直)⁶⁾は、9人制バレーボールの第2サーブについての説明の中で、打点④で行なうサーブを特に「サイド・アンダー・ハンド・サーブ」と呼び、サイドハンド・サーブについては「横なぐりサーブ」と呼ぶことも唱え、区別しようとしている。

また、郷守と朽堀²²⁾は「サイドハンド・サーブはオーバーハンド・サーブの変形である」としながらも、腕の振りによる説明では打点④から⑥までを含めて考えている。

ジェレズニャクら²⁸⁾によると打点⑥によるものを「サイド・サーブ」と称しているが、説明文からはここでいうサイドハンド・サーブを意味するものと思われる。ジェレズニャクらは、サイド・サーブをアンダーハンド・サーブの中に位置づけている。

西郷³¹⁾は「サイドハンド・サーブの打ち方をしながら、ボールを逆回転させる打ち方もできます」と説明しているが、同著の図示説明から判断すると、通称「逆回転サーブ」と呼ばれるものであると思われる。西郷によって「サイドハンド打法による逆回転サーブ」が存在することになり、考え方に特色がうかがえる。

5. 変化するサーブについて

変化するサーブ^{註4)}とは、サーバーによって打たれたボールを自然な落下現象に任せることな

く、意図的にボールに回転を加えたり、あるいは無回転にしたり、ヒット時の力を加減したりしてボールを急速に落したり、浮き上がらせたり、横ぶれさせたりするサーブのことであろう。この意味ではドライブ・サーブも打ち揚げサーブも自然な落下現象に反するものであるから、変化するサーブの中に含めて考えなければならない。しかし、バレーボールでいう変化するサーブの中には、ドライブ・サーブや打ち揚げサーブを含めないのが一般的な見方である。今回の参考文献においても、ドライブ・サーブや打ち揚げサーブを変化するサーブ、もしくは変化球サーブとして挙げている例は皆無であった。

「変化球サーブ」がサーブの中の固有名詞として定着したのは、文献にあらわれたサーブの種類やその説明文等から推して、1964年の東京オリンピック以後である。変化球サーブの名称を持たない「変化するサーブ」は東京オリンピック以前にも存在し、日本の女子チームが「木の葉落し」の名称で、1960年に世界選手権大会（ブラジル）で披露している。この年に出版された前田の著書¹⁾には「ひょろひょろサーブ」なる名称が使われ、同氏の翌年の著書²⁾には「カッティングサーブ」の名称が用いられている。この2つのサーブは今日いわれる変化球サーブをさしていると思われる。

第7表 変化する3つのサーブの関係

り フ ロ ー タ ー ・ サ ー ブ を 取 上 げ て い る 文 献 番 号	ス ラ イ ド ・ サ ー ブ を 取 上 げ て い る 文 献 番 号	て 変 化 球 サ ー ブ を 取 り 上 げ て い る 文 献 番 号	3 つ の サ ー ブ の 関 係 (F) フローター・サーブ (S) スライド・サーブ (C) 変 化 球 サ ー ブ —×— 異なるサーブ —#— 同 じサーブ	り フ ロ ー タ ー ・ サ ー ブ を 取 上 げ て い る 文 献 番 号	ス ラ イ ド ・ サ ー ブ を 取 上 げ て い る 文 献 番 号	て 変 化 球 サ ー ブ を 取 り 上 げ て い る 文 献 番 号	3 つ の サ ー ブ の 関 係 (F) フローター・サーブ (S) スライド・サーブ (C) 変 化 球 サ ー ブ —×— 異なるサーブ —#— 同 じサーブ
1	○	○	(S)×(C)	17		○	(C)×(F)
2		○		18		○	(C)×(F)
6	○			20		○	(C)#(F)
7	○		(F)×(S)	21	○	○	(C)×(F)
8	○		(F)×(S)	22		○	(C)×(F)
9	○		(F)#(S)	24		○	(C)×(F)
10	○	○	(S)×(C) (C)×(F)	26		○	(C)×(F)
12		○	(S)×(C) (C)×(F)	27	○	○	(F)×(S) (S)#(C) (C)×(F)
13		○		29	○	○	(F)×(S) (S)#(C) (C)×(F)
15		○	(C)×(F)	30	○	○	(F)×(S) (S)#(C) (C)×(F)
16		○	(C)×(F)	32		○	(C)×(F)

さて、変化するサーブについては、主にスライド・サーブと変化球サーブ、それにフローター・サーブの3つが考えられる。この3つのサーブのうち2つ以上を取り上げている参考文献について、どのような相互関係で扱っているかをみたのが第7表である。3つのサーブの関係は、球質について異なるものと解釈されるか、同じものと解釈されるか、もしくは打法と球質による観点の差異かについて明らかにされる必要がある。

豊田（直）と山本の共著⁷⁾では、スライド・サーブとフローター・サーブの球質が異なることが図示されているが、一方豊田（直）はその著書⁹⁾の中で、両サーブの球質は全く同じものであることを図示している。

スライド・サーブが文献の中で頻繁に取り上げられているのは1967年までである。同年出版された松平らの共著¹⁰⁾の中で、松平が「変化球サーブ」の名称を使って以来今日まで、文献の中にスライド・サーブという名称はほとんど使われていない。スライド・サーブも変化するサーブの一つであるために変化球サーブの中に含めて考えられるようになったためであろう。豊田（直）²⁷⁾、朽堀²⁹⁾、郷守³⁰⁾らの著書に表われている「スライド・サーブ」あるいは「スライド性」が、変化球サーブと同じ意味に使われているのはそのあらわれである。

変化球サーブとフローター・サーブの関係については第7表からわかるように、分類上の位置づけからみるフローター・サーブの論点が打法の面、あるいは球質の面から、ほとんど異質のものとして扱われていると思われる。先にフローター・サーブの分類上における位置は球質よりも打法に基づいている場合の多いことを明らかにした（第3表）。また、フローター・サーブの打法（テニス打法）によって打ち出されるボールが、回転の有無によってドライブ球になったり変化球になったりすることも取り上げた。このようにフローター・サーブが打法の観点に立った名称として使われている場合、変化球サーブとは次元の違う位置づけになっているのは当然のことである。

松平²⁰⁾はフローター・サーブが変化球サーブと同一のものであることを、サーブの分類によって明らかにしている。

島津²⁶⁾は打法の観点にたってフローター・サーブを扱っているが、ボールの球質としては「ドライブと変化球に近いサーブ」（傍点筆者）になることを説明している。このことはフローター・サーブ打法によって生まれる変化する球と、オーバーハンド打法によって生まれる変化球が若干異なることを意味していると思われる。

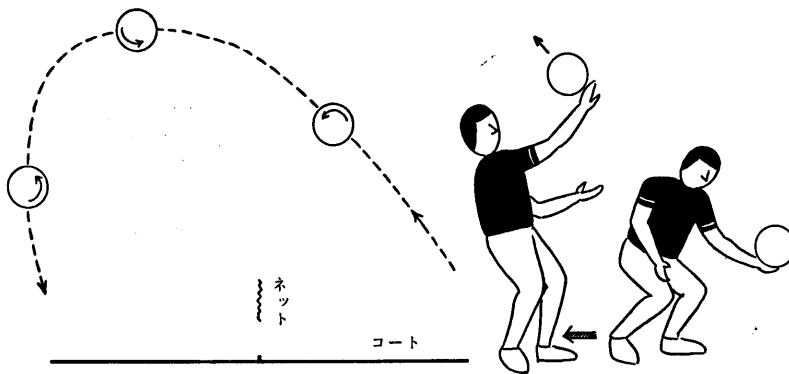
以上のことからわかるように、変化するサーブをあらわすことばとして、主にスライド、変化球、フローターの3つの名称が用いられてきたが、これらは著者によって全く同じ意味を持つものであったり、反対に若干異なった意味を持つものであったりして、サーブの分類の不安定さが指摘される。

6. 逆回転サーブについて

日本の選手が逆回転サーブに接したのは、1957年の世界青年友好大会（モスクワ）のとき、チェコスロヴァキアの選手が打っているのを見たのが最初であることを前田²¹⁾は説明している。その後、日本男子のチェコスロヴァキア遠征（1961年）やメキシコ・オリンピック（1968年）に際して同じくチェコスロヴァキアチームと対戦し、このサーブによって日本チームがさんざ

ん痛めつけられたことが報じられている²¹⁾³⁸⁾。参考文献の中で、このサーブを最初に紹介したのは豊田（博）と松平¹³⁾（1969年）である。

逆回転サーブに関する問題点は「なぜ逆回転サーブといわれるのか」である。松平たちの編著によってこのサーブが紹介されたあと、多くの著書¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁸⁾²⁰⁾²¹⁾²⁴⁾²⁶⁾²⁹⁾³¹⁾³²⁾の中に挙げられているが、この間に対する答は見当らない。逆回転サーブの打法は第3図に示すように、右利きの者ならコートに対して左横向き、もしくは背を向けるような姿勢になり、左手によってトスされたボールを、右手をコート側からコート外側へスウィングし、ボールをすくい上げるようにヒットしてボールに激しい回転を与え、できるだけ高く打ち揚げ相手コートに入れるものである。高く打ち揚げるために松平²⁰⁾は「打ち揚げ逆回転サーブ」という名称を使い、前田²¹⁾は「花火式サーブ」あるいは「天井サーブ」という愛称を用いている。名称の如何にかかわらず球跡に関してはみな合致しており¹⁴⁾²⁰⁾²¹⁾²⁴⁾²⁶⁾³¹⁾、第3図のように説明している。



第3図 逆回転サーブの打法と球跡

ボールの回転方向について豊田（博）たち¹⁴⁾や島津²⁶⁾は「前回り」の激しい回転を与えている。松平たち¹⁸⁾や豊田（博）²⁴⁾は「逆回転」を与えると説明しているが、同著の文意あるいは図示されたものから、前回りの回転であることが明らかである。朽堀²⁹⁾は逆回転を順回転に対するものと考え、順回転するものの中にドライブ・サーブを取り上げているが、ドライブ・サーブのボールの回転に触れている著者のすべてがドライブ・サーブは「前回りの回転」をするものと解釈しているところから、「前回りの回転即順回転」とするのが妥当と思われる。

すなわち、逆回転サーブのボールの回転方向は、前回りの回転（順回転）をしながら飛んでいくことになる。ドライブ・サーブも前回りの回転をしながら飛んでいくが、逆回転サーブがドライブ・サーブと異なる点は非常に高く打ち揚げられることである。高く打ち揚げ、しかも前回りの回転を与えるためには、右利きの者ならコートに対して左向き、もしくは背を向けるような姿勢にならざるをえない。

逆回転サーブは打法と球質を兼ねた名称とみられ、その位置づけは他のサーブからは独立されたものと解釈されているが、西郷³¹⁾は「サイドハンド・サーブの打ち方でボールを逆回転させることができる」と説明し、打法からはサイドハンド・サーブの中に位置づけられることを

提唱している。

7. 助走するサーブについて

助走するサーブは、オーバーハンド打法によるドライブ・サーブを打った時代によく用いられたものである。東京オリンピックを機に9人制から6人制へ、そしてサーブは変化球へと移り、助走する必要は薄らいできたとみられる。そのためにサーブの際の助走に関しては1970年に降に発行された参考文献では、わずかに郷守の著書³⁰⁾のみにみえている。しかし、我が国のトップクラスの選手の中に現在も助走してサーブする者もいるので、助走を取り上げた1969年以前の文献¹¹⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁸⁾¹¹⁾¹⁴⁾によって、打法の観点から整理した。

サーブを行なう際の助走の有無から、山本⁸⁾は「スタンディング・サーブ」と「ランニング・サーブ」を区別し、T. Hoch⁴⁾は「立ったまま行なうもの」と「跳躍して行なうもの」に分けて考えている。助走を伴うサーブとして豊田(博)たち¹⁴⁾は「ランニング助走するもの」と「ステップ助走するもの」を区別した。豊田たちは助走の歩数の違いに着目して分類したと思われる。豊田(直)⁶⁾は「ランニング・サーブは5～7歩の助走を伴うもの」と解釈しており、山本⁸⁾は「ランニング・サーブは3歩から7歩くらいまでのランニング(助走)によって行なわれる」と述べている。

従来から助走するサーブについては「ランニング・サーブ」の名で総称されてきた。サーブの際の助走には、1歩踏み出すものや2～3歩踏み出すもの、あるいは5～7歩も助走するもの等いろいろ考えられるが、これらを総称して「ランニング・サーブ」と名づけるのは不合理に思われる。歩数によってスタンディング・サーブ、ステップ・サーブ、ランニング・サーブの3つに分けて考える(それはきわめて困難なことであるが)のが適当ではなかろうか。

IV ま と め

バレーボールにおけるサーブの種類と分類について、文献を中心に考察を重ねてきたが、以上を要約すると次のようである。

1. サーブの種類の上り上げ方や分類のしかたはきわめて不明瞭である。各々のサーブについては打法や球質が混在していたり、あるいは不明確なものも多い。また著者によっては一貫性の無さも指摘できる。

2. オーバーハンド・サーブは前田や山本あるいは郷守の提唱した「オーソドックスなフォーム」に規定した方が混乱が生じないであろう。「オーバーハンド」を「上手」と解釈することによって、フローター・サーブとの関係を考える上に不都合が生じる。

3. 過去のものになりつつある9人制バレーボールのサーブにおいて説明された「第1サーブ即オーバーハンド・サーブまたはドライブ・サーブ」あるいは「第2サーブ即アンダーハンド・サーブ」のような考え方は改めなければならないだろう。

4. フローター・サーブの起りは球質に基づくものであるが、分類上の位置は打法に基づいていることが多い。フローター・サーブを打法の面から把えたとオーバーハンド・サーブとの間に混乱が生じる。この混乱を避けるためには、打法の面から把えるフローター・サーブの名称を島津や生沼あるいは豊田(直)のいうテニス(式)サーブ、またはスパイク式サーブの名

称にかえる方がよいと思われる。

5. フローター・サーブの球質については変化球とドライブ球になることを、豊田（博）、島津、松平、郷守たちが指摘している。一般的に考えられているように、フローター・サーブを「無回転→変化球」に結びつけるのは危険を伴う恐れがある。

6. サイドハンド・サーブについてはオーバーハンド・サーブあるいはアンダーハンド・サーブとの接点が不明確なために、著者によっては分類の位置づけに苦慮している様子がうかがえる。また、打点（ゾーン）の違いによってサーブの名称を区別しようとする傾向がみられる。

7. 変化するサーブの名称としては変化球サーブやスライド・サーブ、フローター・サーブ等が考えられるが、これらのサーブの相互関係は著者によって同質であったり、異質であったりきわめて不明確なものとなっている。変化球サーブに対する定義も不十分である。

8. 逆回転サーブについては、その名称とボールの回転方向との間に不合理が認められる。

9. 助走の有無によるサーブの分類としては「スタンディング・サーブ、ステップ・サーブ、ランニング・サーブ」の3つに分けて考えることが妥当と思われる。

サーブの技法については今後も研究が進むものと考えられるが、バレーボールの指導に当たって、とくに学校体育の学習の場におけるサーブの指導を前提にする時、サーブの名称を統一するとともに明確な根拠に基づいた種類や系統的な分類が確立されることが強く望まれる。

註

- 1) 学習指導要領をはじめ、ほとんどの文献が「サービス」と「サーブ」を混同して用いている。競技規則書にみる定義においては、現在まですべて「サービスとは……」と説明されてきた。従って本来は「サービス」の方を正しいとすべきであろう。しかし、「サーブ」に関する定義づけは無いままに、競技規則書の付則や注解等においてさえ「サーブ」の名称が何回となく使用されてきた。現在もサーブの方が圧倒的に多く用いられている。昭和50年度の国際競技規則においては「サーブ」は8か所見られたが、51年度版では第24条に使用された1か所（「サーブ・レシーブ」）のみとなり、52年度版においてはこの1か所も削除され、「サーブ」の名称はすべて姿を消した。9人制の競技規則においても52年度版からは、すべて「サービス」に統一された。
- 2) 第1表において「種類や分類の取り上げ方の根拠」が「打法、球質」または「打法→球質」となっている文献。
- 3) 参考文献2) 7) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 18) 20) 21) 22) 24) 26) 27) 29) 30)
- 4) サーブの名称として定着している「変化球サーブ」と区別するために「変化するサーブ」という語を用いた。このため「変化するサーブ」の定義はないが、「変化球サーブ」の定義に関してもほとんど見当らず、池田¹⁷⁾がわずかに「打球のコースやスピードに変化を与えるサーブ」と規定している。

参 考 文 献

- 1) 前田 豊：スポーツシリーズバレーボール、旺文社、1960
- 2) 前田 豊：百万人のバレーボール—新しい6人制と9人制—、報知新聞社、1961
- 3) 黒木 昊：中学校体育指導ハンドブックバレーボールの授業、ベースボール・マガジン社、1961
- 4) Hoch, T. (福岡孝行, 守谷孝治訳)：最新バレーボール教室、ベースボール・マガジン社、1961
- 5) 笠井恵雄, 小鹿野友平：新ルール・6人制バレーボール、山海堂、1962
- 6) 豊田直平：写真と図解によるバレーボール9人制、大修館、1963

- 7) 豊田直平, 山本隆久: 写真と図解によるバレーボール6人制, 大修館, 1963
- 8) 山本隆久: 図解コーチバレーボール, 成美堂, 1965
- 9) 豊田直平: 体育図書館シリーズ6人制バレーボール, 不昧堂, 1966
- 10) 松平康隆: バレーボールの技能と戦法 (松平ほか共著, 図説バレーボール事典) 講談社, 1967
- 11) 金子新一: 中学生のバレーボール, 不昧堂, 1968
- 12) 前田 豊: スポーツ教室バレーボール, 旺文社, 1969
- 13) 豊田 博, 松平康隆: 技術と練習法 (豊田ほか編集, スポーツの科学的指導バレーボール) 不昧堂, 1969
- 14) 豊田 博, 島津大宣: スポーツVコースバレーボール教室, 大修館, 1969
- 15) 豊田 博: もっとも新しいバレーボール, 日本文化出版, 1969
- 16) 日本バレーボール協会: 第1回アジア・バレーボール・コーチ・トレーニング・コース・テキスト(A C Cテキスト), 日本文化出版, 1970
- 17) 池田久造: バレーボール (日本体育協会編, 現代スポーツ百科事典) 大修館, 1970
- 18) 松平康隆, 豊田博: スポーツシリーズバレーボール, 講談社, 1971
- 19) 中村敏雄: バレーボールの指導 (学校体育研究同志会編, 学校体育叢書) ベースボール・マガジン社, 1972
- 20) 松平康隆: バレーボール戦術集 (松平ほか共著, バレーボールの戦術) 講談社, 1972
- 21) 前田 豊: 前田豊のバレーボール290のポイント, 日本文化出版, 1972
- 22) 郷守重蔵, 朽堀申二: バレーボール上達の道, 成美堂, 1973
- 23) 今野堅三, 安西祐子: ファミリー・スポーツ・シリーズママさんバレー, ベースボール・マガジン社, 1973
- 24) 豊田 博: スポーツ入門双書バレーボール, ベースボール・マガジン社, 1973
- 25) Diagram Group: RULES OF THE GAME, PADDINGTON PRESS LTD. 1974
- 26) 島津大宣: バレーボールの技術と練習法 (松平ほか編著, バレーボールのコーチング) 大修館, 1974
- 27) 豊田直平: 体育図書館シリーズバレーボール, 不昧堂, 1974
- 28) Yu. D. ジェレズニャク, Yu. N. クレシチェフ, O. S. チェホフ (本多英男訳): ジュニア・バレーボール教本, ベースボール・マガジン社, 1974
- 29) 朽堀申二: バレーボール (朽堀ほか編著, 球技指導ハンドブック) 大修館, 1974
- 30) 郷守重蔵: 図解コーチ9人制バレーボール, 成美堂, 1975
- 31) 西郷光雄: スポーツシリーズバレーボール, 日東書院, 1976
- 32) 生沼スミエ: スポーツシリーズバレーボール教室, 講談社, 1977
- 33) 文研出版編: グリップ中学保健・体育全, 文研出版, 1977
- 34) 松田岩男監修: 中学ばらシリーズ中学保健体育1~3年, 旺文社, 1977
- 35) 日本バレーボール協会編: バレーボール国際競技規則書 (50~52年度版)
- 36) 日本バレーボール協会編: バレーボール競技規則書 (50~52年版)
- 37) 新興出版編: ハイテスト中学保健体育3年, 新興出版, 1977
- 38) 桑原 博: 笛を友に (月刊バレーボール Vol. 29(8)) 日本文化出版, 1975

Summary

In this paper a survey is given as to, in literature on volleyball, what types of service of volleyball have been referred and how they have been classified. As a result, it has

proved that authors' naming of each service is not well-grounded and that their classification are different. Therefore, in teaching volleyball, especially in coaching services of volleyball in the school physical education, it is highly desirable to establish a well-grounded name for each service and a systematic classification of services.